

東彼杵 ダラフ

17/23郷 駄地郷

長い梅雨は明けて太陽が眩しく照らし始めた。
心を込めて手づくりする姿には笑顔が輝く。
思い出したくないあの夏の日のこと、
七〇年前の記憶を鮮明に伝える大先輩と出会った。





お農笑
母さん
さんの
家の
味の
いっ
ぱい

千綿駅周辺は3つの郷が隣り合っていて線引きが難しい。駄地郷の信号から上り、三叉路にある東彼杵町農産加工センターを訪ねると、所在地は駄地郷だった。元幼稚園の建物がずっと気になっていた。扉や窓枠などにかわいい面影が残る。

「そうそう、ここは駄地。はっはは(笑)」と代表の海田キヨノさん。加工センターは、平成5年に発足した東彼杵町農産加工組合の活動拠点としてスタート。メンバーは主に農家の主婦たちで、地元農産物を生かした特産品や、味噌、まんじゅうなどを手づくりしている。

「最初が一番わっかかったとに、一番はあちゃんになってしまった(笑)」ととにかく明るい海田さん。看板商品の“龍頭泉みそ”は、昔はどこ家庭でも作っていた麦味噌を商品化したもの。以前にくらべて塩分はだいぶ控えめにしたが、材料は国産のみで、保存料や着色料を一切使用しないというこだわりは変えていない。こちらの味噌は学校給食にも使われており、ふるさとの味として懐かしむ人も多いのではと思う。

「ここは暑かでしょう」と両手にウチワでぱたぱたしてくれる優しい高坂由美子さん。まんじゅう作りが始まった。生地をふっくらと発酵させるためには室温管理が大切。空気や風に触れると表面が乾いて割れてしまうこともあるため窓は開けられない。もちろんクーラーはなく、真夏には40度を超す暑さとか。すぐに室内は蒸気で真っ白になった。

蒸すこと15分。「上手にできました」と笑顔の海田さん。特別にできたてをほお張る。ふわふわで、もちもちの食感。餡はあっさりした後を引く甘さで、そのぎ茶の冷茶と一緒においしくいただいた。餡なしの“すぶくれまんじゅう”はジャムを付けて食べるのがおすすめとのこと。期間限定の苺ジャムも人気商品。愛情たっぷりのお母さんたちの加工品は道の駅などで購入できる。



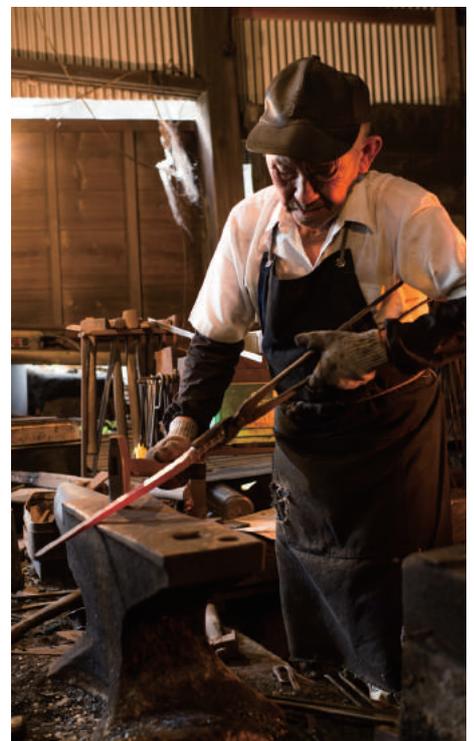
看板のない 手打ちの鍛冶屋



「あっ、大和さんば忘れとったね」と窓を開けた高坂さん。まんじゅうを作っていた建物の下に炎が見える。鉄を叩く音もする。海田さんと高坂さんに駄地郷のことを聞き、公民館前の無人販売所やお寺がいいとを教えてもらっていた。千綿にも鍛冶屋があったとは驚いた。

大和武七さんが汗をびっしょりかいて工場から出てきた。「看板?ないない。掲げたことなかもん。おれ一代」と自分を指さす。大和さんは松原、佐世保などで修業した後、ここに工場を構えた。鍛冶屋歴は軽く50年を越える大ベテランだった。昔はいろいろ作っていたが今は鍬が専門で、鎌や包丁で有名な松原に納めている。

工場では扇風機が作業中の大和さんに少しの涼を提供している。「暑かもん、なごうできん」と仕事は朝7時から数時間に集中。ひと仕事を終えた大和さんはいい顔している。撮影をお願いすると、舌を出したアインシュタインのように、おちゃめにおどけてみせた。



- 左上 | 笑顔の調味料を入れて何でも作ってしまう海田さん
- 左下 | 手づくりの加工品。材料の野菜は自分たちの畑から
- 右上 | 本日のノルマを終えて清々しい表情の大和武七さん
- 右下 | 飾り気はいらない、ただ畑を耕すためのものを作る



あの夏の日 傷ついていた少年の心

貴重な戦争体験を話してくれた朝長昭一郎さんへ

今年で70年ですか。
今でもやっぱり思い出しますよ。

線路沿いで元役場職員の朝長昭一郎さんに出会い、私たちに1冊の本を見せてくれた。『遙かなる思い出』（東彼杵町教育委員会発行）は戦時中の学徒動員や従軍した兵士の追想をまとめた本で、朝長さんが助役の頃に携わり、自身の体験も綴られている。

「14歳でした。当時、ここの旧制中学生は大村の第21海軍航空廠という飛行機を作る工場へ毎朝、千綿駅から通っていました。私は諫早へ。農学校だったため兵隊さんや工員さんの食糧を作ることがお国のためだと言われ、学校実習地で農作業に従事していました。カボチャとかトウガンとか腹にたまるような品物を。今みたいにトマトなんて贅沢品はなかったとですよ」

1945年8月9日のこと、聞いてみた。「桑畑に堆肥を運びよった時でした。ドシンという重い音の後に、赤みがかかった黄色の入道雲のようなものが空を覆い、一時太陽が隠れたようになりました。その頃はみんな空襲警報に慣れてしまっていて、敵機が上空に来ない限りは作業を続けたものですが、その時は指示も待たずに一目散に防空壕に逃げ込んだのを覚えております」

下校後、諫早駅でその脅威を目の当たりにする。新型爆弾が投下されたことを知った。駅は数えきれない負傷者で埋め尽くされていた。手足がない人、男か女かもわからない人、悶え苦しむ人……。朝長さんは「まさに生き地獄」と表現した。



✓空襲警報はよく遅れた。
だから西彼杵の上空に敵
機を見つけた時は自ら避
難したようだ



遙かなる思い出
～戦中・戦後回想の記～

発行 平成6年8月12日
東彼杵町教育委員会

経験したことを
後世につなぐことは
生き残った我々の
務めではなからうかと
思っています。

「負傷者に水を飲ませるな。飲ませるとすぐに死ぬ」という駅員の言葉があり、地下道で足を引っ張られても断った。同じ学徒動員にお願いされた時はさすがに迷った。「君は仲間じゃないかと言われましたもんね。どうせ死んでしまうのなら…水を飲ませればよかったかなと思いますもんね。今でもたまに夢に出てきますよ」

かすれたラジオ放送は情報が錯綜して“志布志湾の上空を旋回中の敵戦闘機”が武留路山から出てきたこと、大村駅の線路に這いつくばってグラマン戦闘機の空襲に耐えたこと、原爆投下の夜に両親たちが千綿駅から負傷者を兩戸にのせて学校の裁縫室まで運んだこと、長崎大学医学部の運動場に焼け残りの木材を寄せ集めて重油をかけて火葬していたこと、そしてそのにおい。

どれも生々しいもので、まるで昨日の出来事のように鮮明に、丁寧

に、体験した朝長さんにしか語りすることができない貴重な話ばかりだった。時折、うっすらと涙を浮かべる姿もあり、嫌なことを思い出させてしまった後悔の念に駆られたが、「生き残りの我々がですね、経験したことを後世につなぐことは、我々の務めではなからうかと思っています」と話す朝長さんに救われた。

戦争体験を話すと、「じいちゃん、それは江戸時代のこと?」と言われたこともある。戦争と平和を知る朝長さんは、これからも記憶の継承をしていくつもりだ。「戦争は勝っても負けてもやるものではありません。戦争による犠牲者はだしてはいけません。誰も得をせん」

ゴムボートでキス釣り、釣れない時は川柳をひねる話をしている時、ヘリコプターのバタバタする音が聞こえた。それに気づいた朝長さんの目が一瞬だけ鋭くなったように思えた。このまま平和がいいな。帰り道、おみやげにいただいたトマトをかぶりついた。

※駄地郷へは、町営バス「高峰」のバス停を利用。
次回は坂本郷。お楽しみに！